

専修大学と会計学に思うこと、など

専修大学名誉教授 川口 順一

私は専修大学で27年間会計学の教授を勤め、無事定年を迎えることができた。深く感謝している。

前任の東洋大学から移った当初は、多少の違和感を覚えたが、まもなく専修大学の多くの長所に気付き順応することができた。私見では、専修大学は規律がゆきわたった穏健な大学である。このことは私に安定感をもたらし、この大学でなら落着いて教育と研究に専念できると確信したものである。

商学部では、お互い干渉することなく、伝統的に穏和な人間関係が保たれてきている。不干渉主義の私にはありがたい環境であった。しかし、今となって思えば、若い会計学者などにもっと親密に相談にのったり、学問的助言を与えたりすべきであったと自省している。

会計学科のメンバーは20人を超え、わが国の大学でも有数の多人数であり、会計学の多岐に互る分野をカバーすることができた。私は、会計学総論、財務会計論、連結会計論、簿記Ⅲなどを担当した。初めの三つの講座では、会計の理論を学生に説得力のある論理で明快に解説することに力を注いだ。簿記Ⅲは、最高難度の問題（例えば公認会計士第3次試験レベル）を理論的に詰めていき、計算技術の勘所を会得させるよう指導した。総じて、満足のいく講義を展開できたと思っている。

いつしか私の講義は厳格であるという風評が学内に行き互り、選択履習の講義やゼミには相当の覚悟をもった学生のみが集まるようになっていた。学生から敬遠されることは教師として反省すべきであるが、半面、厳格を承知の上で覚悟をきめた学生だけが集まったことによって高レベルの講義やゼミが可能になった。ゼミの学生から公認会計士第2次試験の合格者が輩出したのもこのことに因があると考えている。

次に、私の論文に込める意気、心構えについて考えるところを述べてみたい。

私の会計学論文に込める唯一至高のものは独創性である。独創性の高いアイデアが閃かない限り論文は書かないのが私の信条である。したがって、私の論文のテーマは時々で異なり、気まぐれの時に唐突に現われたのはこのためである。ここに言う独創性は、宙から新奇なものを取り出す意味ではない。それは、昔から私達の眼の前に存在していたが、その真の姿を見る眼が誰にもなく真実が隠れたままであったものを新しい視点から見直す

ことで真実を顕現させるその新しい見方のことである。

この独創性を得るためには好奇心と懐疑心が必要であり、更に天与の感性も求められる。この意味で論文もまた文学、音楽、美術に近いと言えるであろう。すなわち、学者にも芸術家の本質が不可欠である。

私は会計学の文献を知識欲のために読むのではなく、もしかの啓示をうる手掛りを求めて読むことの方が多かったように思われる。

アイデアがまとまり、論文のテーマが定まったならば、この手中の珠を最良の形で表現することに意を用いた。日本語の文章力、表現力はその人のもって生れたセンスに依るところが大きいであろうが、平明さや簡潔性は日頃の修練で磨くことができるし、注意深い推敲は欠かせない。

私が論文に希んだものは単なる達意の文章ではない。論文を一つの生き物のように活性化させ、読者を自分の世界に引き込む魔力（デーモン）を宿らせることを理想とした。スタンダールやトルストイの小説、フルトヴェングラーの演奏などを想起していただければ、私の意とするところが察していただけるかもしれない。デモーニッシュな論文は、それを構成する一つ一つの論理が強い説得力をもっていること、個々の論理をテーマに沿った全体の見地から有機的に一体化していること、優れた推理小説の筋のように起承転結に齟齬がないことなどの条件を満たしているところから生まれると考える。論理はそれ自体デモーニッシュであり、論文は言うまでもなく論理の集積である。

私は生来きわめて怠惰な人間である。勤勉とか努力は最も性に合わず敬遠してきた。また、本業の会計学よりも趣味の小説読書、音楽鑑賞といった美の世界に魂を奪われ、容易に耽溺する自制心の弱い人間でもある。

このような性向の人間にとり、自由時間が豊富にあり、干渉や拘束の少ない大学教師は誠に得がたい幸運な職であった。多々迷惑をかけたと思われる専修大学と商学部の方々のご寛恕をお願いして結びとする。